

書誌学と思想史研究をつなぐ

—— 書誌から読み解く『百科全書』 ——

Linking Bibliography to History of Ideas: A bibliographical approach to the *Encyclopédie*

小関 武史

Takeshi KOSEKI

パリ＝ヌーシャテルを発行地として記載している『百科全書』のうち18世紀中に発行された様々な版本について、可能な限り完全に整理しておくことが必要である。問題は、これまで一般に考えられていたよりはるかに複雑である。この作業に関わって調査を進めるのであれば、それぞれの巻についてどの版のものを手にしているのか正確に知っておく必要がある。そこで、できるだけ十分にこの問題を扱おうとしよう（注57）。

（注57）異なる版の巻が混じったセットが相当数存在する。たとえば、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校のセットでは、第1巻と第17巻はジュネーヴ版だが、残りはパリ原版である。南カリフォルニア大学には、文章篇の巻はすべてジュネーヴ版で図版篇は原版というセットがある。私自身が確認した範囲でも、このように版が入り交じったセットがいくつかあった。悪いことに、最近シュトゥットガルトのフロマン・フェルラーク（Fromann Verlag）から出た復刻版も混合セットである。文章篇の第6、8、12巻および図版篇の第1、10、11巻はジュネーヴ版である。その他の点から見ても、これは望ましい版ではない。たとえば、第7巻までの奥付は第3巻を除いて欠けている。文章篇の全巻を通してページ番号の打ち間違いが訂正されてしまっているし、相当数の折記号が欠落している。本文の数ページは単なる白紙である。第3巻1ページの項目*CHA、第4巻609ページの*D、第7巻291ページの*FRAUDEでアスタリスクが欠けている。このように妙なことになったのは、おそらく写真複製の際の失敗のせいだろう¹。

はじめに

書誌学と思想史は、異なる学問分野である。書誌学の知識が十分になくても、思想史の研究を進めることはできる。一方、思想史の素養が十分になくても、書誌学の実務（たとえば目録の作成）ができないわけではない。もちろん、両方に通じていればそれに越したことはないが、

¹ Richard N. Schwab, With the collaboration of Walter E. Rex, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, Vol. 1, in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, N° 80, Genève, Institut et Musée Voltaire, Oxford, Voltaire Foundation, 1971, p. 61-62.

不可欠というほどでもない。

では、両方の分野についてそれなりの知識があれば、具体的にどのような利点があるのだろうか。本稿では、その可能性を探ってみたい。

最初に断っておくと、私自身の出発点は思想史である。その後、『百科全書』について研究を進めるうちに、本文理解のためにはさまざまな版本の比較調査が有益であることを認識するようになった。そこから独学で書誌学を勉強したので、その知識には偏りがあり、欠落が多いと自覚している。書誌学に通じた読者の方々からの情報提供を期待している。

本稿の目的は書誌学と思想史をつなぐことなので、それぞれの分野について基本的な内容を含んでいる。たとえば、書誌学に詳しい読者にとっては、書物がどのように製本されているかは、説明してもらってもないだろう。一方、思想史研究者は『百科全書』がどのような著作であるか、よく承知しているにちがいない。しかし、『百科全書』研究者といえども製本上の特徴を把握しているとは限らず、書誌学研究者や図書館職員が『百科全書』の思想史上の意義を知悉しているわけでもない。説明がくどくなるおそれもあるが、ご了承いただきたい。

1. 『百科全書』の諸版本

(1) 正篇と補遺の区別および正篇の出版経緯

最初に、『百科全書』の諸版本について簡単に整理しておこう。

ひとくちに『百科全書』と言っても、その構成は意外と複雑である。目録などで *Encyclopédie* を検索し、18世紀のうちに出版されたものに限定するなどして絞り込みを行うと、全35巻の著作がヒットする。しかし、それらの35巻は均質なまとまりではなく、以下に示すように区別しなければならない。

正篇 文章篇 (Volumes de « discours ») 17巻 + 図版篇 (Planches) 11巻

補遺 (Supplément) 文章篇 4巻 + 図版篇 1巻

索引 (Table) 2巻

「正篇」というのは、一般的に定着した呼称ではない。「補遺」ではないものを便宜的にこう呼ぶことにする。単に『百科全書』と言えば、この正篇を指す。

正篇と補遺では、関与した出版業者も執筆者も異なる。実際、正篇編集の中心にいたディドロは、補遺には協力していない。正篇と補遺とは、別の著作と考えるのが妥当である。もちろん、補遺もまた『百科全書』を名乗っている以上、最終的には正篇と補遺の両方を視野に収めた研究が必要ではあるが、本稿では正篇——それも正篇の文章篇——に限って話を進める。

ここで、正篇文章篇17巻の出版経緯をもう少し詳しく見ておこう。中心にいたのは、ル・ブルトン (Le Breton) という出版業者である。ブリアソン (Briasson)、デュラン (Durand)、ダヴィド (David) という他の出版業者三名を仲間に引き込み、この大事業を手掛けた。

第1巻が出版されたのは1751年6月28日または7月1日と言われている。これ以後、おお

むね一年に一冊のペースで刊行が進むが、1757年11月に第7巻が出版されたのを最後に、事業が一時中断する。1759年3月に『百科全書』に対する出版許可が取り消されたからである(いわゆる発禁処分である)。第8巻から最終第17巻までの10冊は、1765年の末から翌年初めにかけて一括して配布された。発禁処分はまだ解除されておらず、偽装工作が施された。スイスのヌーシャテル(つまりフランス王国の禁令の効力が及ばない土地)の業者が続編を刊行したことにしたのである。もちろん、実際には従来と同じくパリの出版者連合がパリで印刷している。つまり、タイトルページ(標題紙)等に記載された書誌情報は事実と反しているのである。

(2) 版の特定のために

このような偽装工作は、危険思想の流布を警戒する勢力がいる時代と地域にあつては、決して珍しいことではない。そして、その程度の複雑さしかなかったとすれば、『百科全書』は研究者泣かせでも司書泣かせでもなかったことだろう。『百科全書』の版本をめぐる問題は、ここから先が本番である。

世に『百科全書』として出回っているセットの中には、当初からの予約購読者が入手した通りではないものが何種類もある。思想史上の意義を考えれば、正真正銘の初版本(「パリ版」と呼ぶことにしよう)が最も優れており、何らかの形で『百科全書』に言及するなら、初版に基づかなければならない。大まかな内容を知るだけならどの版本でも構わないが、執筆者情報など内容以外の事柄についてはパリ版とそれ以外との間に無視できない差異があるからである。『百科全書』を手にとった研究者は、自分が今見ているものがパリ版なのか、それとも別の版本なのか、判別できなければならない。それは『百科全書』を所蔵している図書館にとっても同様である。

パリ版以外の版本として最もよく知られているのが、「ジュネーヴ版」と呼ばれているものである。パリの出版業者パンクック(Panckoucke)が、もともとの出版業者の許可を得たうえで、1771年から1774年にかけてパリ版の複製を作った。この作業はジュネーヴで行われたが、タイトルページに記された出版地は「パリ」である。出版年についても、パリ版と同じ数字が記載されている。したがって、漫然と眺めていたのではパリ版とジュネーヴ版の区別はつかない。パンクックはなるべく原本のまま複製しようとしたが、それでも数多くの「間違い」が混入している。それらがパリ版とジュネーヴ版の区別に役立つ。分かりやすいのはタイトルページである(図1、図2)。パリ版の*SOCIÉTÉ*がジュネーヴ版では*SOCIETÉ*となっており、最初のEの上にあるべきアクセント記号が欠落している(6行目)。同じくタイトルページの8行目では、パリ版の*MATHÉMATIQUE*がジュネーヴ版では*MATHEMATIQUE*となっており、ここでもアクセント記号の脱落が見られる。しかし、それらはあくまでも指標の一部にすぎない。タイトルページにもヴァリエーションがありうるので、これまでの書誌研究の蓄積をふまえて、本文を含めたチェック項目を一通り検討し、総合的に判断を下す必要がある²。

² パリ版とジュネーヴ版を見分けるための実践的な手順については、以下を参照。福田名津子「名古屋大学附属図書館所蔵のジュネーヴ版『百科全書』の鑑定について」、『名古屋大学附属図書館研究年報』

(I-42-112)

ENCYCLOPÉDIE,

C-258



OU DICTIONNAIRE RAISONNÉ DES SCIENCES, DES ARTS ET DES MÉTIERS,

PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES.

Mis en ordre & publié par M. *DIDEROT*, de l'Académie Royale des Sciences & des Belles-Lettres de Prusse; & quant à la PARTIE MATHÉMATIQUE, par M. *D'ALEMBERT*, de l'Académie Royale des Sciences de Paris, de celle de Prusse, & de la Société Royale de Londres.

*Tantum series juncturaque pollet,
Tantum de medio sumptis accedit honoris!* HORAT.

TOME PREMIER.



A PARIS,

{ *BRIASSON*, rue Saint Jacques, à la Science.
DAVID l'ainé, rue Saint Jacques, à la Plume d'or.
LE BRETON, Imprimeur ordinaire du Roy, rue de la Harpe.
DURAND, rue Saint Jacques, à Saint Landry, & au Griffon.



M. DCC. LI.

AVEC APPROBATION ET PRIVILEGE DU ROY.

図1 パリ版『百科全書』第1巻の標題紙 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵 (筆者撮影)

④ A-592

ENCYCLOPÉDIE,
OU
DICTIONNAIRE RAISONNÉ
DES SCIENCES,
DES ARTS ET DES MÉTIERS,
PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES.

Mis en ordre & publié par M. *DIDEROT*, de l'Académie Royale des Sciences & des Belles-Lettres de Prusse; & quant à la PARTIE MATHÉMATIQUE, par M. *D'ALEMBERT*, de l'Académie Royale des Sciences de Paris, de celle de Prusse, & de la Société Royale de Londres.

*Tantum series juncturaque pollet,
Tantum de medio sumptis accedit honoris!* HORAT.

TOME PREMIER.



A PARIS,

Chés { *BRIASSON*, rue Saint Jacques, à la Science.
DAVID l'aîné, rue Saint Jacques, à la Plume d'or.
LE BRETON, Imprimeur ordinaire du Roy, rue de la Harpe.
DURAND, rue Saint Jacques, à Saint Landry, & au Griffon.

M. DCC. LI.

AVEC APPROBATION ET PRIVILEGE DU ROY.

图2 ジュネーヴ版『百科全書』第1巻の標題紙 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵 (筆者撮影)

ジュネーヴ版以外にも重要な版本がいくつかある。リヴァーサイド海賊版、イタリアで発行されたルッカ版やリヴォルノ版などを挙げておこう³。

さて、パリ版とそれ以外を見分けられれば問題は解決するかというと、事はそう単純ではない。実は「パリ版」にも刷の違いが少なくとも三種類存在するからである。

『百科全書』の出版は大事業なので、無駄に印刷することがないよう、予約購読者に配布するという形式が採用されている。商品としての『百科全書』が採算に合うかどうか、業者としても慎重にならざるをえない。裏を返せば、反響が大きい書物なら増刷されるということである。一巻本ならともかく、セットものが途中で増刷されるとどうなるであろうか。増刷の際に何らかの修正が施されれば、セットの中身が微妙に違って来る。リチャード・シュワップ (Richard N. Schwab) の研究⁴によると、第1巻と第2巻の当初の発行部数は2075であった(初刷: 1751年版)。出版者連合は第2巻の準備中に1100部の増刷を決める。新しく刷られた版は1752年の早い時期に発行され、第1巻全体と第2巻の途中までが初刷とは異なっている(二刷: 1752年版)。さらに1754年になると、それまでに発行された第1巻から第3巻までがそれぞれ1100部増刷され、このときも手直しが増えられた(三刷: 1754年版)。第4巻以降は発行部数も安定し、版元による増刷は行われない。ジュネーヴ版は、主としてパリ1754年版に似せて作られている。先に「パリ版とジュネーヴ版は異なる」と記したが、正確に表現するなら「パリ版初刷とジュネーヴ版は異なる」と述べるのが適切である。そして「パリ版三刷とジュネーヴ版は似ているが、それでも異なる部分がある」ということになる。

手許にある『百科全書』のセットがどの版であるかを見極めるには、第1巻を仔細に検討することから始めなければならない。タイトルページの発行地と発行年が「パリ、1751年 (A PARIS / M. DCC. LI)」だったとして、それが初版初刷のパリ1751年版であるか、それともパリ1752年版か、パリ1754年版か、ジュネーヴ版か、それともリヴァーサイド海賊版などの別の版であるかを特定する。ここが最大の山場なのだが、セットものは油断がならない。あるセットの本体を構成する17冊が、すべて同じ版に由来するという保証がないからである。実際、パリ版とジュネーヴ版が混在したセットも報告されている。さらに言えば、印刷業者と製本業者は別なので、一冊の本を構成する紙がすべて同じ版のものであるかどうかも自明ではない。あるセットを検討すると、この部分はパリ1751年版の特徴を備えているが別のところから判断すればパリ1754年版らしく思われる、ということもある。

このように、『百科全書』の版本問題はかなり複雑である。それだけに、目録で正確な記述をすることが期待される。念のために言えば、所蔵している『百科全書』がパリ版初刷でない

第4号、2006年、45-52頁。ただし、そこでは具体的に触れられていないチェック項目もあるので、万全を期すには注1で触れたシュワップの *Inventory* をふまえる必要がある。

³ 『百科全書』の諸版本については、Madeleine Pinault, *L'Encyclopédie*, Presses Universitaires de France, « Que sais-je ? », 1993 (マドレーヌ・ピノー『百科全書』小嶋竜寿訳、白水社、文庫クセジュ、2017年)の第五章「ヨーロッパで刊行された『百科全書』の諸版について」が簡潔で分かりやすい説明を提示している。

⁴ Schwab, *op. cit.*, p. 81.

からといって、残念がるには及ばない。希少価値という意味では、他の版本も重要だからである。私が過去に調査した範囲で言えば、小樽商科大学図書館所蔵の『百科全書』第1巻は、1100部しか刷られなかった1752年版の特徴を備えていた。

2. 『百科全書』の書誌研究史

『百科全書』の書誌研究は、主として英米の学者によって進められてきた。総合的な研究として重要なものを、二点挙げておこう。

先鞭をつけたのは、英国の研究者ジョン・ラフ (John Lough) である。1968年に出版した *Essays on the Encyclopédie of Diderot and d'Alembert* において、さまざまな版本についての調査結果を提示した⁵。タイトルページの文字を転写し、折記号を用いた校合式を示すなど、書誌学の方法に則った研究成果である。

これを引き継いだのが、すでに何度か触れた米国のリチャード・シュワップである。ヴォルテール財団から発行されている雑誌 *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* の七冊を費やして、『百科全書』の目録である *Inventory of Diderot's Encyclopédie* を完成させた。最後の第7巻だけが1984年と遅く刊行されているが、これは図版篇を扱っているためである。正篇文章篇を対象としている分は、1971年から1972年にかけて、立て続けに発表されている。

シュワップの目録の真骨頂は、『百科全書』のすべての項目(要素)に番号を振り、そのそれぞれについて執筆者情報などを記録したことである。シュワップを無視した『百科全書』研究はありえないと断言できるが、本稿の主題にとって重要なのは、*Inventory* 第1巻に収められた書誌研究の部分である⁶。シュワップとその協力者は、アメリカを中心とした複数の図書館が所蔵する『百科全書』を実際に調査した⁷。そして、パリ版を初めとする『百科全書』正篇文章篇17巻のすべてについて、詳細な書誌記述を行ったのである。すでに述べた版や刷の違いも、もちろん考慮に入れられている。

『百科全書』についての書誌研究として、シュワップを超えるものは出ていない。シュワップは、依然として最も信頼すべき参照先であり続けている。

⁵ John Lough, *Essays on the Encyclopédie of Diderot and d'Alembert*, London, Oxford University Press, 1968. 本書は性質の異なるさまざまな論考を一冊にまとめたもので、第1章“The Different Editions”および第2章“The Panckoucke-Cramer Edition”が版本に関する研究に当てられている。

⁶ *Inventory* の第1巻は、全体が壮大な目録の序論である。序論の第9節“Editions bearing the Paris-Neufchastel imprint”以降が書誌研究の成果である。

⁷ シュワップが主として依拠したのは、カリフォルニア大学デーヴィス校が所蔵するセットである。これを同大学パークレー校所蔵本(以前はパリ・ソルボンヌにあったもの)と照合している。さらに、ダグラス・ゴードンが所持していたボルチモアのセット(出版者のル・ブルトンに帰属していたと推定されている)、オクスフォードのクイーンズカレッジ図書館、フランス国立図書館、パリ・マザリーヌ図書館、カリフォルニア大学リヴァーサイド校などのセットが調査対象となっている。Schwab, *op. cit.*, p. 64-65, note 61.

3. 理想本と「目の前の一冊」

(1) 理想本と校合式

本の状態は、どれも同じとは限らない。目の前にある一冊は、一部が欠けていたり、訂正が施されていないなかったり、それぞれに違っている。そうした個別的な違いを超えて、出版者が望んだ通りの形態を保持している本を「理想本 (ideal copy)」と言う。これはパウアーズ (Bowers) によって提唱された概念で、高野彰の『洋書の話』でも詳しく説明されている⁸。書物の書誌記述は、理想本についてのものでなければならない⁹。シュワップが *Inventory* で試みたのは、まさにパウアーズの定義に基づいた理想本の記述であった¹⁰。

目の前にある『百科全書』がどの版・刷かを特定するためには、シュワップを参照し、どれと一致するかを見極めなければならない。そこで重要なのが、タイトルページ (標題紙) と校合式 (きょうごうしき: collational formula) である。

タイトルページについては、シュワップに転写があるだけでなく、ウェブ上で写真を見ることもできる。以前から提供されているものとしては、シカゴ大学の ARTFL Project のものがある。2017年10月19日に一般公開されたフランス科学アカデミーの ENCCRE でも、マザリーヌ図書館所蔵の初版初刷の画像が閲覧可能になっている¹¹。目の前の一冊がパリ版と同じ特徴を備えているかどうかは、容易に見て取れるであろう。

しかし、校合式を読み解くには、一定の訓練が必要である。思想史研究者の中には、反射的に拒否反応を示してしまう人もあるかもしれない。それは非常にもったいないことである。見た目ほどの難しさはないので、実際に読み解いてみよう。

以下に掲げるのは、シュワップに基づく『百科全書』パリ版初刷第1巻理想本の書誌記述である¹²。タイトルページ、奥付、校合式、内容、折記号、ページ付、の順に記している。とく

⁸ 高野彰『洋書の話 第二版』、朗文堂、2014年、207-211頁。

⁹ パウアーズは次のように記している。“The collational formula and the basic description of an edition should be that of an ideally perfect copy of the original issue. A description is constructed for an ideally perfect copy, not for any individual copy, because an important purpose of the description is to set up a standard of reference whereby imperfections may be detected and properly analyzed when a copy of a book is checked against the bibliographical description.”, Fredson Bowers, *Principles of the bibliographical description*, New York, Princeton University Press, 1949; Reprint, St Paul’s Bibliographies, 1994, p. 113.

¹⁰ “What we are attempting to establish here, however, are the ‘ideal’ descriptions of each of the folio editions, always aware that there might be variations in particular specimens of each.”, Schwab, *op. cit.*, p. 63; “I am using here Fredson Bowers’s definition of ‘ideal copy’, and generally following his system of descriptive bibliography.”, *Ibid.*, p. 64.

¹¹ https://artflsrv03.uchicago.edu/images/encyclopedie/V1/ENC_1-NA5.jpeg (ARTFL Project) と <http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedie/section/S01-2bafef8e8c7/?p=v1-p13&> (ENCCRE) において、パリ版第1巻のタイトルページを閲覧できる (2020年1月7日現在)。

¹² Schwab, *op. cit.*, p. 66-68. ただし、明らかな誤記 (たとえばブラケットが開かれたまま閉じられていないケースなど) は訂正した。また、理想本の記述として疑問がある場合は、根拠を示したうえで修正案を提示している。

に注目していただきたいのは、太字で示した部分である。これが校合式に当たる。

Title page : *ENCYCLOPÉDIE, / OU / DICTIONNAIRE RAISONNÉ / DES SCIENCES, / DES ARTS ET DES MÉTIERS, / PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES. / Mis en ordre & publié par M. DIDEROT, de l'Académie Royale des Sciences & des Belles- / Lettres de Prusse ; & quant à la PARTIE MATHÉMATIQUE, par M. D'ALEMBERT, / de l'Académie Royale des Sciences de Paris, de celle de Prusse, & de la Société Royale / de Londres. / Tantùm series juncturaque pollet, / Tantùm de medio sumptis accedit honoris ! HORAT. / TOME PREMIER. / [Ornament : Apollo dispelling clouds and standing above symbols and instruments of the arts and sciences. 'Papillon inv. et Sculp. 1747'] / A PARIS, /*

Chez { *BRIASSON, rue Saint Jacques, à la Science.*
DAVID l'aîné, rue Saint Jacques, à la Plume d'or.
LE BRETON, Imprimeur ordinaire du Roy, rue de la Harpe.
DURAND, rue Saint Jacques, à Saint Landry, & au Griffon.

[double rule] *M.DCC.LI. / AVEC APPROBATION ET PRIVILEGE DU ROY.*

Colophon, p.914 : De l'Imprimerie de LE BRETON, Imprimeur ordinaire du ROY. 1751.

Collation : π^4 ($\pi 1+\chi^2$), *A-F*⁴, *G*², *A-M*⁴ (-M2+*M2), *N-Z*⁴, *Aa-Zz*⁴, *Aaa-Zzz*⁴, *Aaaa-Zzzz*⁴, *AAAA-YYYY*⁴, *ZZzzz*³, (*5Z3 blank*).

Contents : $\pi 1^{Fv}$: blank, $\pi 1+\chi 1^r$: half-title : *FRONTISPICE / DE / L'ENCYCLOPÉDIE.*, $\pi 1+\chi 1^v$: blank, [inset : engraved frontispiece with caption : *FRONTISPICE DE L'ENCYCLOPEDIE. Dessiné par C. N. Cochin fils Chev.^{er} de l'ordre du Roi, de l'Acad. R.^{lc} de Peinture, 1764. Gravé par B. L. Prevost Graveur de L. L. M. M. Imp.^{les} et R.^{lc} 1772.*], $\pi 1+\chi 2^r$: *EXPLICATION / DU FRONTISPICE DE L'ENCYCLOPÉDIE.*, $\pi 1+\chi 2^v$: blank, $\pi 2^r$: half-title : *ENCYCLOPÉDIE / OU / DICTIONNAIRE RAISONNÉ / DES SCIENCES, / DES ARTS ET DES MÉTIERS. / TOME PREMIER.*, $\pi 2^v$: blank, $\pi 3^r$: titlepage, $\pi 3^v$: blank, $\pi 4^{Fv}$: [Dedication] *A MONSEIGNEUR / LE COMTE D'ARGENSON, / MINISTRE / ET SECRETAIRE D'ETAT DE LA GUERRE.*, pp.i-xlv : *DISCOURS PRÉLIMINAIRE / DES EDITEURS.*, p.xlvi : *AVERTISSEMENT.*, pp.xlvii-li : **EXPLICATION DÉTAILLÉE / DU SYSTEME / DES CONNOISSANCES HUMAINES.*, pp.li-lii : **OBSERVATIONS / SUR LA DIVISION DES SCIENCES / DU CHANCELIER BACON.*, [inset : folded between pp.lii and 1 : **SYSTÈME FIGURÉ / DES CONNOISSANCES HUMAINES.*], pp.1-914 : Text of the *Encyclopédie* (A-AZYMITES), p.[915] : *ERRATA.*, pp.[916-918] : blank.

Signatures : \$2 signed (-G2, -5Z2). Leaves 2S1 and 2S2 use the long 's'. That form of 's' is not used elsewhere in the *Encyclopédie* except once in vol. IX. It appears in the Riverside set on exactly the same leaves as in the original. 5M2 (p. 827) is signed 'Mmmmm ij'¹³.

¹³ 最後に添えた折丁 5M2 の折記号についての注釈は、シュワップの記述には見られない (Schwab, *op. cit.*, p. 68)。しかし、一橋大学社会科学古典資料センター所蔵本だけでなく、慶応義塾図書館 (三田メディア

Pagination : 491 leaves, pp.[12], i-iii, 1-914, [4]; plate : [Frontispiece] (opp. sig. $\pi 1+\chi 2^r$) ; inset : (opp. p.1), [misnumbering 838 as 738].

「何のことやら」と思った読者もあるだろう。この式をすぐに言葉で説明する前に、書物がどのようにして製本されているか、確認しておこう。その手順を踏んだ方が、式の意味がよく分かるからである。印刷業者の仕事は文字通り印刷するまでであり、製本は別の職人の仕事である。製本職人は、どのようにして紙の束を正しく並べているのだろうか。

そのことを理解するには、製本前の紙の状態を見るのがよい (図3)。

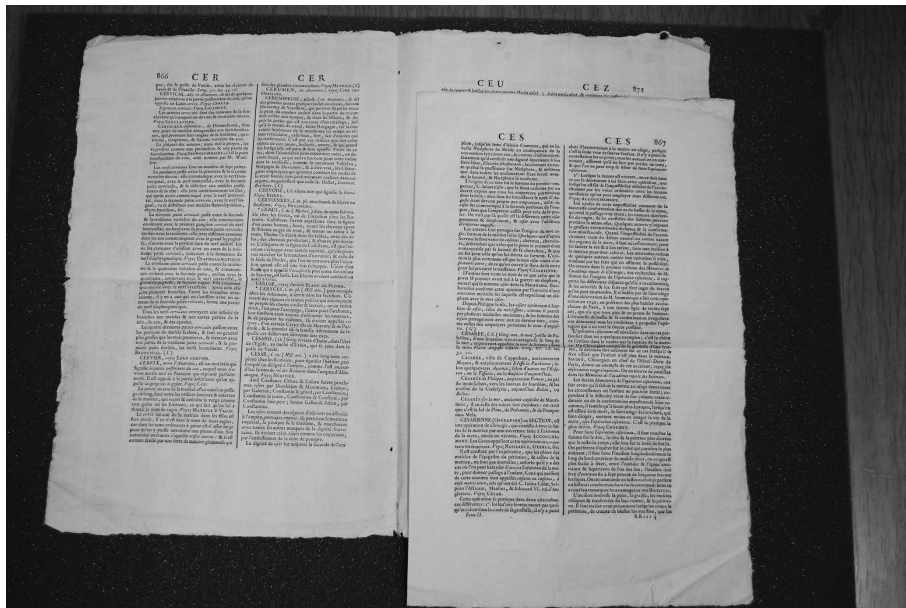


図3 パリ版『百科全書』第2巻のための折丁 (RRrrr) 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵 (筆者撮影)

一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵する『百科全書』パリ版第2巻は、最後の紙葉が欠損している。そして、その代わりに折丁が綴じられる前の状態で別に保管されている。周囲を断裁される前で紙のサイズが分かるという意味でも、非常に貴重な資料である (巻き尺で実際に測ってみたところ、広げた状態で縦42cm、横54.5cmであった)。

ページ番号 (ノンブル) が順番に並ぶようにするためには、2枚の紙 (全紙=印刷機を通すときの紙) を重ねて折る必要がある。そうして折り畳まれたものを、「折丁 (gathering)」と言う。大きな紙を二つ折りにしているのので、『百科全書』は二折版 (フォリオ版) ということになる。

センター) 所蔵本 (142X@37@1) や京都大学附属図書館所蔵本 (10-0/E/別貴) においても、折記号の二つ目が小文字になっている。さらに、ARTFLとENCCREのサイトで閲覧可能な画像でも、二つ目は小文字である。一方、小樽商科大学図書館所蔵本 (Z 12.1) から判断すると、パリ1752年版では折記号が“MMmmm ij”と記されている。したがって、827ページの折記号の2文字目が小文字か大文字かは、初刷と二刷の判別にとって重要である。この点に関しては、シュワップの見落しまたは記載漏れであろう。

もともと1枚につながっていた紙は、製本されるとその物理的關係が見えづらくなる。2枚重ねの内側の紙は連続するが、外側にあった紙は隣り合わない。図3を例にとれば、内側の紙(867ページから870ページまで)は折り畳んだ後も隣り合うことになる。しかし、外側の紙(865、866、871、[872]ページ)は内側の紙によって隔てられる。そこで、実際の書物については、「紙葉 (leaf)」を数えるのが現実的になる。製本された状態で捉えたときの紙一枚のことである。表と裏に印刷されるので、「1紙葉 = 2ページ」である。『百科全書』について言えば、「1折丁 = 2全紙 = 4紙葉 = 8ページ」という関係が成立する。

作られた折丁は、順番に並べなければならない。そのための手掛かりが「折記号 (signature)」である。どこに折記号を示すかは書物によって異なるが、『百科全書』では紙葉表面の右下に登場する。写真で言えば、867ページにある“RRrrr ij”がそれである。“ij”はローマ数字の2であり、「折丁RRrrrの2枚目」を表している¹⁴。865ページの下部には、折丁の1枚目を表す“RRrrr”という折記号が印刷されている(ローマ数字は添えられない)。

折記号RRrrrのついた折丁は、4枚の紙葉(=2枚の全紙)から構成されている。これを“RRrrr⁴”と表現する。紙葉の枚数を肩付き数字で表すのである。折記号が規則正しく並んでいけば、アルファベットを列挙するには及ばない。ハイフンで結べばよいのである。

では、以上の予備知識をもとに、校合式(再掲)を解説しよう。

Collation : π^4 ($\pi 1 + \chi^2$), $A-F^4$, G^2 , $A-M^4$ (-M2+*M2), $N-Z^4$, $Aa-Zz^4$, $Aaa-Zzz^4$, $Aaaa-Zzzz^4$, $AAaaa-YYyyy^4$, $ZZzzz^3$ (5Z3 blank).

「巻頭に折記号のない4紙葉から成る折丁 π がある。その折丁の1枚目の紙葉 $\pi 1$ の次に、折記号のない2紙葉から成る折丁 χ がある。イタリック体の折記号 A のついた折丁以下、折記号 F のついた折丁まで6個の折丁(A, B, C, D, E, F)が続き、いずれも4紙葉から成る。折記号 G のついた折丁は2紙葉から成る。以下、最後の折丁を除き、すべての折丁は4紙葉から成る。折記号はローマン体の A から始まり、二巡目は Aa 、三巡目は Aaa 、四巡目は $Aaaa$ 、五巡目は $AAaaa$ となっている。途中、折丁 M の2枚目の紙葉($M2$ 、91ページと92ページに相当)は取り除かれ、代わりに折記号 $*M$ ijとアスタリスクを付した紙葉が付け足された。最後の折丁 $ZZzzz$ は3紙葉から成る。」

言葉で説明すると大変だが、式で表現すれば簡潔である。

目の前の一冊を校合式で表すためには、実際に本を1枚ずつめくり、折記号を確認しつつ紙葉の枚数を数える。『百科全書』のように1冊が1000ページ前後もあるような大著の場合、かなりの時間を要する作業である。

¹⁴ 折記号は折丁の1枚目では必須であるが、それ以降については書物によって異なる。『百科全書』では折丁の2枚目にも折記号が添えられる。そのことは、理想本の書誌記述の“Signatures”欄を見れば確認できる。すなわち、“\$2 signed (-G2, -5Z2)”とあったのは、「それぞれの折丁の2枚目に折記号があるが、折丁 G の2枚目と折丁 $5Z$ (=ZZzzz)の2枚目には折記号がない」ことを意味する。

(2) 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の『百科全書』（貴 C:258）

一橋大学社会科学古典資料センターは、二種類の『百科全書』を所蔵している。請求記号は、「貴 A:592」と「貴 C:258」である。先に結論を述べると、「貴 A:592」はジュネーヴ版であり、「貴 C:258」はパリ版初刷である。以下に掲げるのは、第1巻「貴 C:258:1」の校合式である。

Collation : π^4 , A-F⁴, G², A-M⁴ (-M2+*M2), N-Z⁴, Aa-Zz⁴, Aaa-Zzz⁴, Aaaa-Zzzz⁴, AAaaa-YYyyy⁴, ZZzzz².

一橋所蔵本はシュワップが示した理想本の状態とほぼ一致しているが、二箇所だけ違いがある。

一つ目は、折丁 χ が存在しないことである。理想本の校合式は“ $\pi^4(\pi1+\chi^2)$ ”だったが、一橋所蔵本の校合式は単に“ π^4 ”である。2紙葉から成る折丁 χ は、口絵およびその説明に相当する¹⁵。この本の所有者のもとには口絵が配布されなかったか、配布されたものの正しい場所に挿入されなかったか、いずれかである。少なくとも、第1巻の別の場所には見当たらなかった。どうしてこのような事態が生じたかと言えば、口絵が本体と同じタイミングで配布されなかったからである。第1巻が予約購読者のもとに届けられたのは1751年だが、口絵はコシャンによって1764年に原画が描かれ、1772年に彫られた。第1巻の購入者は、20年以上経ってから口絵を受け取ったことになる。その際、「この口絵はここに綴じ込むのがふさわしい」と指示されているはずである。その通りに製本されたものが理想本の条件を備えていることになるが、指示通りになるとは限らない。所有者が変わってしまい、口絵が届かなかった場合もあるだろう。一橋所蔵本がどのような運命をたどったかは不明だが、口絵は存在しない。このことから分かるように、書誌記述に際しては、校合式だけでなく内容の説明も添える必要がある。理想本との照合を念頭に置いて、あるべきものが「ない」ことも注記しなければならない。そこまで厳密に目録を作成しておけば、ある本についての校合式を見るだけで、口絵の有無などを判断できるのである。

理想本と一橋所蔵本のもう一つの違いは、最後の折丁 ZZzzz が3紙葉ではなく2紙葉から構成されていることである。この点については、そもそもシュワップの記述が適切かどうかという疑問を拭えない。校合式の最後に“5Z3 blank”と記されているように、最後の紙葉は表裏とも空白である。この紙葉は折丁 ZZzzz に属していない可能性がある。本来、折丁は大きな紙を折り畳んで作るものなので、紙葉の数は偶数でなければならない。肩付き数字が奇数であることは不自然なのである¹⁶。書物の最初と最後については、マーブル紙の補強のために紙が

¹⁵ 理想本の書誌記述に“Contents”という項目があったことを想起していただきたい。そこに折丁 χ の内容が説明されている。折丁 χ の1枚目表 (χ^1) には口絵の略題が記されており、同じく2枚目表 (χ^2) には口絵の説明がある。口絵そのものは、二つ折にされた χ の間に挟み込まれ、“inset”と表現されている。

¹⁶ 最後の折丁 5Z が3紙葉あるように見えますれば、それは2紙葉から成る折丁の後に1枚の紙葉が追加されたか、4紙葉から成る折丁の4枚目が削除されたか、いずれかである。最後の折丁が2紙葉しかない版本が存在することを考慮すると、前者の可能性が高いと言える。また、折丁 5Z の2枚目

足されることがあるので、それによって紙葉の枚数が異なることはありうる。いずれにせよ、最後の紙葉の枚数は版の特定にとって大きな問題ではない。

結論として、一橋所蔵本「貴 C:258:1」は、限りなく理想本に近いパリ版初刷第1巻であると断定できる。同じ請求記号「貴 C:258」のついているセットの第2巻以降も調べてみたが、全体がパリ版の特徴を備えていると言える。一方、「貴 A:592」のセットは、あらゆる面から見てジュネーヴ版であると認定できる。

4. 差し替え紙葉をめぐる諸問題

(1) 校合式から読み解く不規則な事態

すでに述べたように、一橋所蔵本「貴 C:258:1」には口絵が欠如しており、そのことは校合式から読み取れる。これは「理想本にはあるが一橋所蔵本にはない」という事実を表しているが、そもそも理想本において不規則な事態が発生していることもある。それも校合式を一瞥すれば分かる。具体例を見てみよう。以下に示すのは、『百科全書』第5巻の校合式の一部である。

Collation : ... AAaa-KKkk⁴, I^e LLll⁴, II^e LLll⁴, I^e MMmm⁴, II^e MMmm⁴, NNnn-ZZzz⁴ ...

折丁 LLll と折丁 MMmm には、第一のもの (I^e は première の略) と第二のもの (II^e は deuxième の略) がある。折丁 KKkk と折丁 NNnn の間には、本来は二つしか折丁がないはずなのに、四つもあることが読み取れる。印刷が順調に進んでいけば、このようなことにはならなかった。続きの部分がすでに印刷された後に届いた原稿が予定よりも大幅に分量が超過し、無理やり押し込まれたという事実を表している。この不規則な事態を引き起こしたのはデイドロで、ここには「百科全書 *ENCYCLOPÉDIE」という項目が収められている。デイドロが『百科全書』という大プロジェクトの意義を説いた渾身の項目で、締め切りに追われながらペンが止まらなくなった様子が目に浮かぶようである。

このように、校合式を読み解く術を心得ていけば、印刷の際に何か普通ではないことが起きたらしいと気づくことができる。それは緊急事態であって、そこには思想史上の重要問題が潜んでいる可能性があるのである。

(2) 差し替え紙葉

そのような緊急事態のうち、ここでは差し替え紙葉の問題を検討してみたい。

に折記号がないことも、この推測を補強する。各折丁の2枚目の紙葉に折記号があるのは、全紙2枚を重ねて折る際に間違いが生じないようにするためであろう。全紙1枚だけを折るなら、そのような配慮は不要である。現実には、2紙葉から成る折丁 G では、2枚目の紙葉に折記号がない。折丁 5Z が2紙葉から成る場合、理想本の校合式は ZZzzz² (5Z2+1) となる。

刷り上がった後に、事情があって内容を変更しなければならないことがある。このとき、変更を書物上で実現するための方法の一つが、紙葉を差し替えることである。

シュワップによれば、『百科全書』に見られる差し替えには「さまざまな理由」がある。文体や字句の改良、間違いの修正や情報のアップデートに関するものが多くを占めるが、政治的・宗教的な理由から、慎重を期して紙葉が差し替えられることもある¹⁷。ここに至り、書物の外形的なあり方は、内容の検閲の問題と接続することになる。

差し替えの有無は、校合式を見れば分かる。『百科全書』パリ版初刷の第1巻の校合式に、 $A-M^4(-M2+*M2)$ という部分があった。校合式の解説において、「折丁Mの2枚目の紙葉(M2、91ページと92ページに相当)は取り除かれ、代わりに折記号*Mijとアスタリスクを付した紙葉が付け足された」と述べた部分である。

差し替え作業の実際は、どのようなものだったのだろうか。最初に印刷された紙葉の表面には、“Mij”という折記号が付されていた。折丁Mの2枚目という意味である。その紙葉の表面または裏面には問題があると判断され、削除されることになる。これを削除紙葉(cancellandum, cacellanda)と言う。

変更の必要が生じたとき、そのページだけ(片面だけ)を印刷することはできない。かといって、全紙(シート)を丸ごと印刷し直せば、4ページ分になる。この例で言えば、全体を刷り直すと、修正の必要ない93ページと94ページ(折丁Mの2枚目紙葉とは綴じ目を挟んでつなげた3枚目の紙葉)まで印刷し直すことになり、無駄が生じる。合理的な方法は、問題の生じた紙葉の両面だけを印刷し直すことであろう。そうすれば、1枚の全紙に2紙葉分を印刷できる。具体的には、左に92ページ、右に91ページという具合に、あえて左開きの書物にとっては逆方向に思われるように配置し、そのうえで全紙の表と裏に同じものを印刷するのである。刷り上がった紙を中央で断裁すれば、断裁線を綴じ目に合わせるようにしたときに、表が91ページ、裏が92ページの紙葉が2枚出来上がる。これが差し替え紙葉(cancellans)である。全紙半分の大きさになったこの紙葉を、購入者に届ければよい。

紙葉を差し替えるためには、不要になった紙を折り目の近くで切り取り、新しい紙を貼りつけなければならない。剥がれないようにしっかりと貼るためには幅のあるスタブ(のりしろ)が必要だが、作業の跡は目立たない方がよい。他の紙葉を切らないように注意を払うのも、重要なことである。この作業が製本前に行われるなら、折り目に近いところで削除紙葉を切り取り、差し替え紙葉を貼りつければよい。そうすれば、スタブの幅を狭くすることができるので、作業の跡は目立たなくなる。平べったい一枚の紙を扱うことになるので、他の紙葉を損傷する恐れもない。工程としては容易であろう。しかし、製本後に紙葉を差し替えるとなると、作業の難度は格段に上がる。とくに、分厚い本でこの作業を行うのは、かなり難しいと思われる¹⁸。

¹⁷ Schwab, *op. cit.*, p. 129-130.

¹⁸ 本稿執筆中に、シンポジウムの報告者でもある松波京子先生より、スタブに糊づけする作業を伴う紙葉差し替えは印刷所で行われるのが一般的であると教えていただいた。ここに記して感謝申し上げる。

実際の差し替えの跡を、写真で見てみよう（図4）。見開きの右側は、一橋所蔵本「貴C:258:1」の紙葉M2表面である。見たところ、他の箇所との違いはない。しかし、折り目部分を覗き込めば、目立たないように紙葉を貼りつけた跡を確認することができる。天、地、小口の断裁面が他の紙葉と揃っており、しかも赤く塗られた痕跡が認められることから、製本前に紙葉が差し替えられた可能性が高いように思われる。現物を手に取れば分かることでも、写真だと気づきにくいかもしれない。まして、ウェブ上での公開を念頭に置いてページを真上から撮影すると、綴じ目の部分は隠れてしまうので、閲覧者が貼りつけた跡に気づくのは困難であろう。

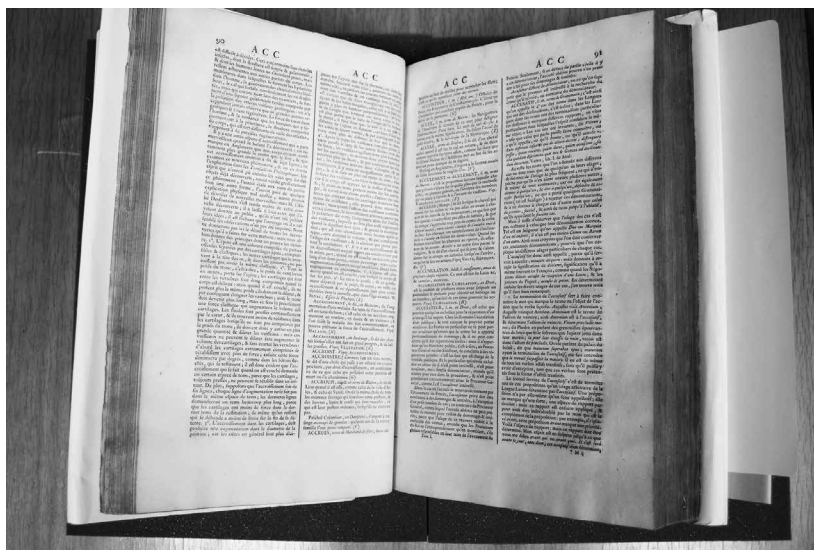


図4（上）バリ版『百科全書』第1巻の差し替え紙葉M2（見開き右側。91ページの右下に*Mijと記されている）
（下）同じ見開き部分を書物の上部から覗き込むと、かろうじて差し替えの痕跡を識別できる。スタブがわずかに浮かび上がっているのはここだけで、ページ下部では見分けがつかない。一橋大学社会科学古典資料センター所蔵（筆者撮影）

ただし、『百科全書』に関しては、紙葉差し替えが印刷所で完了していたとは言い切れない。なぜなら、紙葉が差し替えられていないセットが存在するからである。

もちろん、作業の跡が一目瞭然で判別可能なこともある（図5）。同じセットの第2巻は全体的に製本が雑で、紙葉の差し替えも目立つ仕上がりになっている。紙葉3D3の差し替えでは、削除紙葉の一部が綴じ目から1cmほど残っている。おまけに、差し替え紙葉を断裁するとき右下の部分を折り返していたため、形が乱れてしまった。それでも、断裁面は揃っており、周囲も赤く塗られている。これもまた、製本前に紙葉が差し替えられたのではないだろうか。

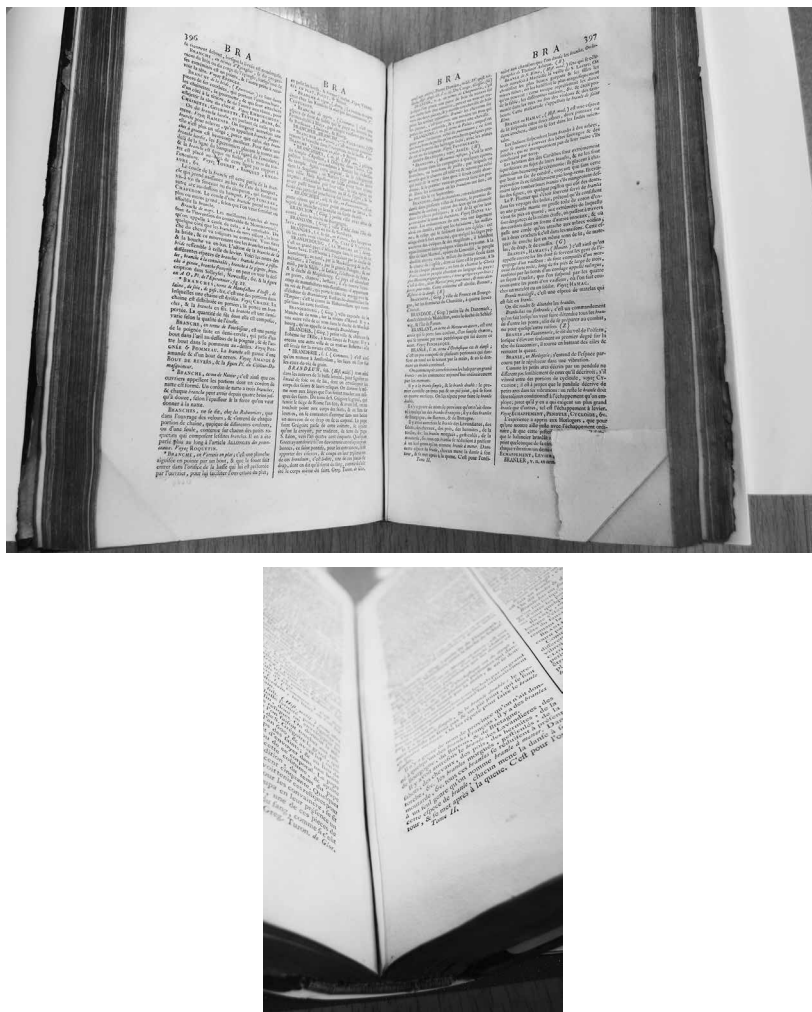


図5 (上) パリ版『百科全書』第2巻の差し替え紙葉3D3(397-398ページ) (下) 同じ見開き部分を冊子の下部から覗き込んだもの 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵(筆者撮影)

ここで、問題を少し展開してみよう。

紙葉の差し替えは、本文を修正するために行う処置である。しかし、修正の方法は紙葉の差し替えに限られるわけではない。どのタイミングで修正が行われるかを、時間軸に沿って考えてみたい。

まず、最も早い段階としては、印刷前の手稿における執筆者自身による書き換えがある。要するに推敲だが、この段階で修正があったかどうかは、印刷本からは見抜けない。『百科全書』には手稿が残っていないので、ここは未知の領域である。

次に、印刷中に修正が入る可能性がある。『百科全書』は何千という部数が刷られるので、途中で間違いに気づいて活字を組み直すことがある。その結果、同じ巻なのにその紙葉だけ内容が異なる、という事態が起こりうる。

最後に、印刷後に修正が施される場合だが、対処法は主として二つに分けられる。一つは紙葉の差し替えによる方法、もう一つは正誤表（エラータ）を作成する方法である。

それぞれには、どのような特徴があるだろうか。紙葉を差し替えれば、元の紙葉は削除される。物理的な痕跡が消えるので、書物を手に取った人は元の文章を読めない。出版者側からすれば、「なかったこと」にできる。一方、正誤表を添える場合、間違いを含む文章は依然として元の場所にあり続ける。「なかったこと」にはできない。

出版者の都合からすれば、紙葉を差し替える方が、問題を大きくせずに済む。しかし、紙葉の差し替えにはタイムリミットがある。印刷した紙を配布して間もないうち（あるいは配布する前）でなければ、この方法は使いにくかったはずである。時間が経過すると、差し替え紙葉が本の所有者のもとに届かない可能性が高まる。多くの人の目に触れた後では、全体に行き渡らないかもしれない差し替え紙葉ではなく、書物の一部となるように印刷された紙葉に正誤表を載せざるをえない。

『百科全書』のような複数の巻から成る辞典の場合、正誤表がどの巻に掲載されるかにも、注意を払うべきである。第1巻のための修正は、すでに第1巻末尾の915ページに *ERRATA* として掲載されているばかりではない。第3巻冒頭にも、「最初の二冊のための正誤表 (*ERRATA pour les deux premiers Volumes.*)」がある¹⁹。

以上をふまえて、紙葉の差し替えと正誤表を一体的に捉えて、修正が施された順序に従うと、次のように配列することができる（3と4は入れ替わる場合もある）。

- 1) 印刷前に手稿で修正
- 2) 印刷中に活字を組み直し

¹⁹ *Encyclopédie*, III, p. xv-xvj. さらに、第1巻762ページにある項目「糸繰り車 *ASPLE」を修正するための折丁（折記号はないのでシュワップは χ をあてがっている）は、理想本では第2巻末尾に付け足されることになっている（Schwab, *op. cit.*, p. 68）。この折丁は、第1巻末尾に綴じられていたり、第1巻762ページに対置するように綴じられていたりする場合もある（Schwab, *op. cit.*, p. 69, n）。慶應義塾図書館（三田メディアセンター）所蔵本では第1巻末尾に綴じられており、一橋所蔵本では紙葉そのものが存在しない。

- 3) 印刷後に差し替え紙葉を用意
- 4) 印刷後に当該巻に正誤表を掲載
- 5) 印刷後に後続巻に正誤表を掲載

書誌記述の校合式 (*Collation*) および内容 (*Contents*) を読み解けば、「印刷に間に合わなかった修正」がどこに存在するかを把握できる。正確に書誌や目録を記述するのが書誌学者や図書館職員の仕事だとすれば、修正の意味を解明するのは思想史研究者の務めである。

もっとも、実を言えば、『百科全書』については「修正問題」の研究が進んでおり、書誌学の知識がなくてもそれほど支障はない。シュワップには削除紙葉と差し替え紙葉に記されていた文章が復元されているし²⁰、古くはゴードンがこの分野の研究を行っている²¹。それでも、一般論としては、書誌記述を出発点として修正の問題に分け入ることが可能である。

(3) 目録作成の重要性

ここまでは、書誌と目録の区別を厳密に立てないまま議論を進めてきた。高野彰は『洋書の話』の一章を「記述書誌と目録の違い」に割いている。両者の差は、詳しさの違いではない。ひとこと言えば、理想本について記述したのが書誌であり、特定の本について記述したのが目録である²²。シュワップが *Inventory* で行ったのは、『百科全書』の書誌記述である。一方、一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵する『百科全書』について本稿で示したのは、目録（のための材料）ということになる。

先に述べたように、『百科全書』の修正問題を研究するには、書誌学の知識がなくても支障はない。理想本について言えば、確かにその通りである。しかし、特定の書物における修正に関しては、事情が異なる。特定の書物についての記述——すなわち目録——が詳しく作成されていれば、その書物にだけ生じた「修正」に気づくことができるのである。その実例を簡単に紹介することで、本稿を締めくくろう。

問題の一冊は、パリ版ではなくジュネーヴ版の第2巻である。社会科学古典資料センターの請求記号では「貴 A:592:2」に該当する。現在、センターの利用は申込制になっていて、文献調査を行うときは事前に書名や請求記号を伝える。センター職員が本の状態を確認し、閲覧に供することができるかどうかを判断するのである。何か問題があれば、この段階で利用希望者に伝えられる。私が「貴 A:592:2」の閲覧を申し込んだところ、一部のページが切り取られているという報告が上がってきた（2019年11月14日）。

実際にその本を調べてみると、確かに多くのページが切り取られていた。それだけではない。

²⁰ とりわけ、Appendix B “The censored texts and cancels”, Appendix C “The article CONSTITUTION UNIGENITUS”, Appendix D “The censored text of the article GOMARISTES” が詳しい。Schwab, *op. cit.*, p. 127-188.

²¹ H. Douglas Gordon and Norman L. Torrey, *The Censoring of Diderot's Encyclopédie and the Re-established Text*, New York, Columbia University Press, 1947.

²² 高野、前掲書、219-227頁。

本文の一部が黒く塗りつぶされている場所もあったのである。これは一体何を意味しているのだろうか。

削除された部分は、他の本を参照すれば復元できる。すると、一定の傾向が見えてきた。削除されていたのは、大半がディドロやその周辺にいた人々によって書かれた項目であり、宗教や哲学に関するものだったのである。ある時期にこの本を所有していた人物または機関が、ディドロたちによって展開される新しい思想に激しい敵意あるいは警戒心を抱き、その文章を抹殺しようと考えてこうした行為に及んだと推測される。この問題については、本稿のもとになったシンポジウムの翌日（2019年12月21日、於一橋講堂）に開催された日本18世紀学会の研究会において、「切り裂かれた『百科全書』」と題して報告した。いずれ別の機会に論文として公表する予定である。

終わりに～今後の課題

最後に、今後の課題をまとめてみよう。

1998年に『洋学の書誌的研究』を世に問うた松田清先生とは、2000年代の初め、けいはんな学研都市（関西文化学術研究都市）にある国際高等研究所の研究会で顔を合わせる機会があった。年に数回というそれなりの頻度で開催されていた研究会だが、松田先生はその研究会にお越しになると、その間に行った書誌調査のことをメンバーに話してくださった。そのようなとき、松田先生は口癖のようにこう仰っていた。「この間、どこそこに行って、これこれの本を触ってきました」と。「本を読む」ではなく、「本を触る」。読むことはもちろん大事だが、実際に手に取って初めて分かることもある。さまざまな書物を調査してこられた研究者の凄さが、「本を触る」という簡潔な一言に凝縮されている。

書誌学の知識があれば、思想史に関する研究のヒントを得ることができる。思想史の知識があれば、目録作成の意義も理解できるのではないだろうか。

思想史研究者として、私は図書館が所蔵する個別の西洋貴重書について、詳しい目録が作成されてほしいと願っている。書物は宝の山であり、目録は地図である。詳しい地図があれば、宝を探り当てるのが楽になる。

しかし、どこまでやるかという問題がつかまとう。図書館を取り巻く環境は厳しく、人手は足りていない。西洋貴重書の目録作成に人員を割く余裕はないかもしれない。それでも、目録作成の重要性が少しでも認識され、詳細な目録が蓄積され、それを出発点とする研究が生み出されることを期待してやまない。

参考文献

- Bowers (Fredson), *Principles of the bibliographical description*, New York, Princeton University Press, 1949; Reprint, St Paul's Bibliographies, 1994.
- Gordon (H. Douglas) and Torrey (Norman L.), *The Censoring of Diderot's Encyclopédie and the Re-established Text*, New York, Columbia University Press, 1947.
- Lough (John), *Essays on the Encyclopédie of Diderot and d'Alembert*, London, Oxford University Press, 1968.
- , *The Encyclopédie*, London, Longman, 1971 ; Genève, Slatkine Reprints, 1989.
- , « Connaissance de l'Encyclopédie », in *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, N° 1, 1986, p. 18-25.
- Pinault (Madeleine), *L'Encyclopédie*, Presses Universitaires de France, « Que sais-je ? », 1993. (マドレーヌ・ピノー 『百科全書』小嶋竜寿訳、白水社、文庫クセジュ、2017年)
- Schwab (Richard N.), With the collaboration of Walter E. Rex, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, 7 vol., *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, N° 80, 83, 85, 91-93, 223, Genève, Institut et Musée Voltaire, Oxford, Voltaire Foundation, 1971-72, 1984.
- 井田尚 『百科全書——世界を書き換えた百科事典』、慶應義塾大学出版会、2019年。
- 鷺見洋一 『『百科全書』と世界図会』、岩波書店、2009年。
- 高野彰 『洋書の話 第二版』、朗文堂、2014年。
- 福田名津子 「名古屋大学附属図書館所蔵のジュネーヴ版『百科全書』の鑑定について」、『名古屋大学附属図書館研究年報』第4号、2006年、45-52頁。
- 逸見龍生 「『百科全書』を読む——本文研究の概観と展望」、『欧米の言語・社会・文化』第11号、新潟大学大学院現代社会文化研究科「ヨーロッパの基層文化と近代」プロジェクト、2005年、39-92頁。
- 松田清 『洋学の書誌的研究』、臨川書店、1998年。